主日礼拝
２０２４年2月１８日（日）
題　「良い羊飼い」
テキスト：ヨハネによる福音書１０章１～１８節

皆さん、おはようございます。
今日は宣教の題に「良い羊飼い」と付けました。良い羊飼いとは、イエス・キリストのことです。
　私は洲本教会に赴任してこの３月で丸１０年となりますが、赴任した最初の年のクリスマスイブのキャンドルライトサービスで初めて賛美した「イエスこそ羊飼い」という歌・賛美に感動しました。その歌詞は「1.この世のなやみおおく　かなしみもおいけれど　わたしとともに　あるきたもう　主のみうでにすがろう　イエスこそ　ひつじかい　そのつえにまもられる~
2,めぐみはみちあふれて　よろこびが　うまれる　おそれはいつか　あとなく消え　生きるちからがわく　イエスこそ　ひつじかい　そのあいにまもられる　めぐみは　あふれて　生きるちからが　わく」です。慰めと元気を頂いたことを思い出します。
さて、今日の聖書の個所は「羊の囲い」のたとえです。
　　この個所には、イエス時代の羊飼いと羊の関係が語られています。
　1:「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほか
　　の所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。
「はっきり言っておく」という言葉は、新約聖書の原典のギリシア語では「アーメン、アーメン」という言葉で、主イエスが大切なことを語る時に用いられています。当時、羊は通常は十数匹で飼われていたようです。人間の身長の高さほどの柵に囲われ、昼の間は囲いの外で過ごし、野獣から身を守るために夜は囲いの中に入っていたようです。羊のことをよく知っている羊飼いに守られたいました。
羊と羊飼いは親密な関係で、羊にはそれぞれに名前が付けられており、
羊は羊飼いの声を聞き分け、自分の羊飼いにはついていくのです。
時々、盗人や強盗が襲って来たようです。羊飼いは全力で自分の羊たちを守ったのです。余談ですが、昔、トルコにパウロの伝道地をめぐる旅に行った時にバスの中から、道を横切る羊と羊飼いを見たことがあります。羊飼いはジーンの姿で、現代の羊飼いを思わされました。今日の聖書の個所２節以降には、
　2:門から入る者が羊飼いである。
　3:門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自

分の羊の名を呼んで連れ出す。
4:自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。
5:しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」とあります。
イエスは当時の律法の専門家たちに対して、羊と羊飼いのたとえ話しをされましたが、彼らはイエスの話しを理解できなかったようです。
「 6:イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。」とあります。
イエスは良い羊飼いのことを語っています。
◆イエスは良い羊飼い
7:イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。
イエスはご自身を「羊の門」にたとえられたのです。羊たちは、柵の門を通って、柵の中に入り、安心して守られて夜を過ごせるのです。これはイエスと羊たちのつながりを通して、人はイエスを門・入口とする時、天と地をお造りになった愛なる神さまとの関係が結ばれるということを教えられたのです。
8:わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。
この言葉は、「わたしより前に来た者」とは、羊を神の元へと導かない人々、つまり、盗人であり、強盗である。今イエスのそばにいた、宗教家であるユダヤ教の権威者・ファリサイ人のことであるように思えます。
そして、
9:わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。
10:盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。
イエスは重要なことばを毅然として語られたのです。
11:わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。
12:羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い、また追い散らす。
―― これも当時の権威主義的なファリサイ派やサドカイ派の人々への批判です。

13:彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。
14:わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊も
わたしを知っている。
15:それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと
同じである。わたしは羊のために命を捨てる。
これから先のイエスの生涯は十字架への道、苦しみの道です。
教会の暦ではレント・受難節に入りました。わたしたちもそれぞれ、悩み多い地上を歩んでいかなければなりません。イエスの群れである教会にも試練の時はあります。しかし、イエスは自分の羊をご存じなのです。羊も羊飼いであるイエスを知っているのです。イエスは人間を罪の重荷と支配から解放するために来てくださった方です。わたしたちも飼い主イエスの羊なのです。主イエスはわたしたちと共にいてくださるのです。
またイエスは、１６節で「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。」と言われます。
これは今日的に言えば、神の羊は、教会内だけではなく、教会の外にもいる、とのことだろうかとも思えます。そして「イエスはその羊をも導かなければならない。」と。
その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。教会は救い主イエスにある群れなのです。
羊飼であるイエスについて行けば、群れは安心であり安全なのです。
17:わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたし
を愛してくださる。
ここには、イエスの十字架の死への決意と、そこにも神は共におられこと、また復活の命、永遠の命につながる道があることを教えてくださっているのです。
18:だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそ
れを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けるこ
ともできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」
イエスは自分の与えられた命を自由に使うことを神に許されているのです。
イエスは、自分の羊を求め、捜し、共に生きるために歩まれたのです。
わたしたちもイエスというまことの羊飼いにはなれなくても、イエスについて歩む羊飼いの友として生きることはできるのです。神さまの憐みと導き、イエス・キリストという希望の光が与えられていることを思います。
わたしたちも、まことの羊飼いである主イエスについて行きたいと願います。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。